愛知教育大学教育実践総合センター紀要
第8号，pp. 125～132（February, 2005）

S. カヴェラウの社会科教育論序説

－1924年の「歴史教授のための国際大会」から－

舩　尾　日出志　（愛知教育大学　社会科教育講座）
（2004年10月29日受理）

Einleitung in die Gemeinschaftskundelehre von S. Kawerau

- Aus den Ergebnissen der Internationalen Geschichtstagung 2.-4. Oktober 1924 -

Hideshi FUNAO (Aichi University of Education, Department of Social Studies)

Vorwort

Die unvermeidbaren politischen Implikationen der Geschichtsdidaktik wurden am schärfsten von Siegfried Kawerau gesehen, der mit Paul Oestreich zu den führenden Köpfen des Bundes entschiedener Schulreformer gehörte und sich in vielen Schriften und Vorträgen vorwiegend mit dem Geschichtsunterricht und der politischen Bildung befaßte. Er ist als Wortführer des Bundes in Fragen des Geschchtsunterrichts anzusehen. So leitete er z. B. die Vorbereitung für die Internationale Geschichtstagung 2.-4. Oktober 1924. Hier haben wir uns mit den Vorträgen von S. Kawerau an dieser Internationale Geschichtstagung beschäftigt.
Keywords：徹底的学校改革者同盟，国家と国民（ネーション）と民族〔人民〕，歴史教授の倫理的課題

はじめに

エストライヒとともに徹底的学校改革者同盟の有力メンバーであったジークフリート・カヴェラウ（1886-1936）は歴史教授学の必然的な政治的意味を十二分に理解していた。したがってカヴェラウは多くの論説や講話のなかで歴史教授や政治的陶冶に取り組んだ。かれは歴史教授の諸問題における同盟の代弁者であるとみなされうる。かれはたとえば歴史教育の国際大会を指導した。ここで筆者が基本資料とするのはおよそ80年前，1924年にドイツでおこなわれたその大会でのカヴェラウの講話である。非戦闘員を巻き込んだ初の大規模な世界戦争の反省にもとづき，戦争と戦争の思想的準備である国家主義，排外的民族主義，人種主義が批判されている。そして対置されているのは国民的連帯性の思想であり，連帯性の教育であると考える。残念ながらその後10年も経たないうちに国家主義と人種主義の権化であるナチスが台頭し，権力を奪取し，侵略戦争を実行するのである。しかしそれだけにこの演説で披瀝された思想は真剣に受けとめられるべきであろう。とりわけ現下，国家が国民を台なしにしようとする動き，たとえば国家の政策に反する国民の動きをヒステリックにバッシングする風潮がみられ，そのことと同時並行的に他国民・他民族への蔑視と歪んだ優越感にもとづいた「愛国心」を青少年に強要しようとする動きがあるだけに。

Ⅰ　前提的な論述

1．歴史教授の国際大会を指導したカヴェラウ

ジークフリート・カヴェラウは徹底的学校改革者同盟の創設時（1919年秋）以来の有力メンバーであり，パウル・エストライヒの腹心とも言える人物である。たとえばかれは1922年に『徹底的学校改革者同盟　その成り立ちと本質』という本を刊行し（エストライヒは序文を執筆），同盟の基本思想を紹介している。エストライヒ以外に，わたしが特にカヴェラウにも注目した理由の１つは，かれには社会科教育，とくに歴史教育に関連した講演や論説が多いからである。自身が従軍した世界大戦とその後の革命の体験にもとづいて，かれは第１に平和教育としての歴史教育の在り方を提起し，第２にドグマ的な歴史教授に対して問題性の道を提起し，第３に過度な民族主義と偏狭な愛国主義の教育を批判し，公民的世界市民の育成を目指した。

そのカヴェラウが輝いた場面は1924年（10月２日～４日）の「歴史教授のための国際大会」である。それは徹底的学校改革者同盟の主催にもかかわらず，パウル・エストライヒでなく，カヴェラウが主導的役割を果たした唯一の大会であったし，その後に実施された国際的な平和大会への橋渡しをする大会でもあった

（エストライヒは自伝のなかで次のように述べている「1924年にわたしたちの「歴史教授のための国際大会」が〔ほとんどすべてのその後の大会がそうであったようにベルリン－シェーネベルクの公会堂で〕，わたしがきっかけを作ったベルリンにおける国際平和大会との関連で開催された」）。

その大会は次のような講話によって構成されていた。

導入
カヴェラウ：永遠の革命（歓迎の辞にかえて）
第１部　歴史哲学的原論（初日）
Th. レッシング：歴史とは何か
P. ホニヒスハイム：社会学，現代の社会的・精神的危機のなかでのその本質，その発展およびその課題
P. カンフマイアー：経済学的歴史考察
F. ヴュシンク：歴史における絶対的価値陶冶の可能性について
F. ヴュシンク：歴史と生活における二元性の意義について
R. シュトレッカー：個人と大衆
K. フリース：神官と科学（「宗教による学校監視」の前史）
カヴェラウ：国家，国民（ネーション），民族〔人民〕
第２部　世界を反映するなかで（２日目）
A.J. グラント：イギリスとドイツ
F．ブイスン：祖国と人類
H. リヒテンベルガー：ドイツとフランスの文化的密接性
E. カルコフスカ：ポーランドとドイツ
M. スツァロッタ：ポーランドからの挨拶
S. メンデルスゾーン：ポーランドにおけるユダヤ人学校
H. ティヴェ：平和教育
F. オレスタノ：ヨーロッパ国家連合
A.Y. アリ：インドとヨーロッパ
Y.P. ツァイ：中国とヨーロッパ
H. G. ケスラー：ジュネーブ国際連盟第５回総会
第３部　教授実践（３日目）
F.J. グールト：歴史教授の倫理的課題
G. クレム：文化科としての歴史教授
E. ハイヴァンク：人間科としての歴史教授
R. フリードリッヒ：ハンブルク学校の実践から
R. フリードリッヒ：訓育的歴史教授の評価のための視点
O. タッケ：外国語教授と民族的感情と意志および民族を超越した感情と意志への教育
総括
カヴェラウ：世界市民，ヨーロッパ人，ドイツ人

２．考察の対象とする基本資料

ここで基本資料（Siegfried Kawerau(Hrsg.): Die ewige Revolution, C.A. Schwetschke & Sohn, Berlin 1925, S.200-218；S.439-453）とするのは，カヴェラウによる上記大会での２つの講話である。また以下の文中《　》内はすべて筆者による補足である。

最初に考察するのは第１部「歴史哲学原論」における講話「国家，国民（ネーション），民族〔人民〕」（STAAT, NATION, VOLK《これら３つのドイツ語単語を適切に翻訳するのは難しい。わたしは一応STAAT＝国家，NATION＝国民（ネーション），VOLK＝民族ないし人民《たとえば日本のVOLK＝日本民族，アメリカのVOLK＝アメリカ人民》と考え，ここではそのように翻訳することとした》）である。

続いて大会全体の総括的講話である「世界市民，ヨーロッパ人，ドイツ人」を考察する。

II　「国家，国民（ネーション），民族〔人民〕」論

１．カヴェラウの問題意識

カヴェラウ自身は講演テーマ設定の理由として「民族〔人民〕」，「国家」，「国民」という３つの概念がほぼ見さかいなしに互いにまるで同義語のように使用されていることを指摘している。しかしわたしたちはそのようなテーマで講演がおこなわれた背景には，第１次世界大戦とその敗戦にもとづくドイツの状況，反戦的な動きもあった一方で，ドイツにとって過酷であったヴェルサイユ条約等への恨み等を口実とした偏狭な愛国主義，反ユダヤ主義に代表される排外主義的民族主義の扇動（1923年11月にはヒトラーによるミュンヘン一揆が起こっていた）があったことを知っている。

２．民族〔人民〕について

カヴェラウはまず民族〔人民〕，すなわち「現実離れした思弁の出発点となっている最も単純な概念」から述べる。「現実離れした思弁」とは「純粋にアーリア人の血が流れている」というような幻想のことを指し示している。カヴェラウはいわく「生物学的種族統一性の意味における純粋の民族〔人民〕性（Volkstum）は今日もはや存在しない」。２つの理由から。

① さまざまな民族の混血のゆえに，
② 精神的要因（たとえば言語）の優位ゆえに。

理由①については：「30年戦争以前にはドイツは1800万の人口を有したが，その後はおよそ700万だったことが思い出され，スペイン人，イタリア人，スウェ

ーデン人，クロアチア人等々の自由通過が思い出され，ヨーロッパのすべての民族〔人民〕がドイツにおいてランデブーをしたことが思い出される。そしてそれらのことはより小さな度合いにおいてではあるが，1700年から1715年までの時期《スペイン継承戦争：英＋蘭＋墺＋普vs仏＋西》，1756年から1763年までの時期《７年戦争：普＋英vs墺＋ザクセン＋露＋仏＋西》，1800年から1813年《ナポレオン戦争》までの時期に繰り返された。そしてそれらの事実はさまざまな家族史において反映されており，そしてヨーロッパのすべての民族〔人民〕の膨大な混血がおこなわれた」。この点について，「日本民族」に関してもまったく同様のことを言うために，何も専門書をひもとく必要はない。『日本語大辞典』（講談社，1989年版）の「日本人」項目には次のように書かれている。「……南方アジア系，北方アジア系，中国大陸系の三系統の混血による多元的な起源をもつ民族と考えられている」。

理由②については：「決して親戚とはいえないが，数分後には両親やきょうだいやその他の血縁者よりもより親しい人々が存在するという事実がある。心や感情の近縁性はあらゆる血の結びつきよりもより強力である。そしてわたしは憚ることなく次のように言う。すなわち，わたしはたとえばドイツ民族〔人民〕のなかのユダヤの血が流れるきょうだいたちに共感する。かれらはこの10年間の苦悩と困難《ヨーロッパにおいて，とりわけ中世以降ユダヤ人差別はずっと存在したとはいえ，第１次世界大戦開始後には相当酷くなったということは，たとえばカール・ポパーの自伝『果てしなく探求』（森博司訳，岩波現代文庫，2004年，下巻の３頁等参照）からも分かる》を，この運命の10年間を心の中でショックを受けつつ過ごしてき，そして健康と生活と収入を度外視してより良き未来のために活動するという強固な意志をもっている。わたしはユダヤの血が流れるそれらのきょうだいたちと，純粋にアーリア人の血が流れ，そして働く人々を犠牲にして暴利を貪り，暴力を崇拝し，そしてレッシングやヘルダー，ゲーテやカント，ペスタロッチやヴィルヘルム・フォン・フンボルト，フィヒテやマルクスの名前のなかに含まれている偉大なドイツの過去の精神を常に否認しているあらゆる人々よりもより近い親戚であると感じている」。筆者もアジア系の留学生たちと接するときに同様な感覚をもつことがある。たとえば日本において謙虚に，地道に学ぶ留学生たちに共感し，連帯感をもつことがあっても，声高に他のアジア諸民族を蔑視し，愛国心を強要する思想にはとても共感できない。

では「現実離れした思弁の出発点となっている最も単純な概念」である民族〔人民〕，もはや存在しない「純粋の民族〔人民〕性」の意義とは何なのか。それに関して，カヴェラウは大げさな歴史的回顧をする必要はない，ただ両目をしっかりと開ける必要があるだけだとする。そして次のように述べる。「というのは，わたしたちの眼前で世界中のあらゆる構成要素から刻印された類型を有するアメリカ民族〔人民〕が形成されているからである。そして，ヤンキー類型が疑いなく原住民インディアンの類型と類似性を示していることを観察することは貴重であり，それは気候と土地が民族〔人民〕に与える影響にとっての重要な例である。したがって次のように言うことができよう。すなわち民族〔人民〕は土地に属し，土地無き民族〔人民〕は，浮遊しそして移住すると，変わってしまうと」。

確かに姿形は明らかに日本人なのに，その振舞は明らかに日本人的ではない日系ブラジル人，日系アメリカ人をわたしたちは知っている。カヴェラウはそのような民族〔人民〕が運命によって形成されたものであり，国家および国民の材料となるとしている。すなわち，たとえば日本民族〔人民〕はアメリカ国家やアメリカ国民の，あるいはブラジル国家やブラジル国民の材料となりうるのである。

３．国家について

次にカヴェラウは国家を規定する。

「国家は社会の垂直的層形成であり，諸階級相互の上下関係を定める構造である。生産不可能なさまざまな財を私的な相続権によって上級階層に結びつけておくために。その一方で下級階層は何らかの仕方であくせく働く。しかしその相続権は唯一，国家が，（生産不可能であるゆえに）本来的に一般的な所有物であるのだが，しかし特別な占有者に独占的地位を与えるさまざまな財の私法的相続維持のための家庭の道具である場合に，家庭において保証される」。

その規定をカヴェラウはヴント，オッペンハイマーらの国家理解によって補強する。「歴史的現象として」，とフランツ・オッペンハイマー《Oppenheimer, Franz：1864-1943，ドイツの経済学者・社会学者》は論じているが，「国家は本来的に，その成立からして，むき出しの暴力以外のなにものでもない。国家はしかし直ちに共同体の諸成分と混ざり合い，つまり法権利の守護と国境の守護を継承することでその暴力を権力に，そして自分自身を統治権に変える。国家がそのようにして成立してきた事実への疑いはもはや可能ではない。そのような歴史的事実の完璧な明確性がみようとされないときでさえ，証明は単純に経済的な手段によって演繹的に，そしてしかもまさにより数学的におこなわれる。というのは世界史において何らかの意義を有するあらゆる国家は，すなわちそれらからわたしたちの国家が直接的に由来し，あるいは文化の重要な要素を継承しているあらゆる国家は階級国家だったからである。そして階級は暴力によって生じる以外の何ものでもありえない」。ヴント《Wundt, Wilhwlm：1832-1920,

ドイツの心理学者》もまた，「国家は秩序ある共同生活の本来的形態である」という意見を強く精力的に退け，そして明確に次のように述べている。「移住してきた支配的人種は土着の人々を屈服させるか，あるいは排除する。したがってさまざまな民族〔人民〕の混合から，すべての国家的に組織されたさまざまな文化的民族〔人民〕が生じる」。オッペンハイマーとヴントは国家の成立について以上のように述べている。つまり国家はある部族がある部族を征服し，しかしその部族を言葉のもっとも大胆不敵な意味において破滅させるのでなく，自身のために働くことを強いた世界史的瞬間において生じたのである。オッペンハイマーは生活欲求の充足のための２つの手段を，すなわち政治的手段と経済的手段を，ドイツ語で表現するならば略奪（Raub）と労働（Arbeit）を定式化した。つまり略奪は国家における手段であり，報酬が支払われない他者の労働の収奪である。ミュラー-リアー《Müller-Lyer, Franz：1854-1916，ドイツの心理学者》は第３の手段として遺伝的手段を，つまり相続を付け加えた。ここでは一度獲得された支配の維持が問題となる。相続は家族によって保証される。その際，カヴェラウは相続されるべき強奪的地位の堅固な基盤を封建社会においては土地であると，現代資本主義世界においては鉄，石炭，石油という地下資源，それゆえ見えにくい，であるとしている。

そのようにカヴェラウは縷々述べる。ここで何といっても重要なのは国家を「垂直的層形成」とし，さらに「国家を権力と財産を無制限に相続するための家庭の道具」であるとする規定である。しかしカヴェラウが比較的軽く述べている「何よりも土地と地下資源の私的相続に基盤をおく国家の垂直力に，補強しつつ付け加わるのは，類似の，教会およびさまざまな同盟における諸階級階層化の垂直力である」との指摘も興味深い。すなわち「垂直的層形成」としての国家を支える組織もまた同様の垂直的性格を有しているのである。水平的性格を有する団体はむしろ国家にたいして異質性を有しているというのである。2004年４月より始まった国立大学の独立行政法人化もまた，大学をより以上に国家政策に加担させようとする動向のなかで生じたことなのであろう。

４．国民（ネーション）について

国家はいわば上から下への関係である。しかし上からの国家の階級圧力はまだその拡張については何も語っていない。カヴェラウは拡張が実は水平勢力によって規制されるとする。拡張は国民（ネーション）の基本原理である。

① Nationの歴史的意味変遷：カヴェラウによればNationは元々，人々がそこで生まれる部族連合を意味し，その後，大学において同郷者の意味で使用された。つまり1400年頃プラハには４つの“nationes”がいた。すなわちベーメン人，バイエルン人，ポーランド人，ザクセン人が。その概念は次第に広くなり，15世紀半ば頃その概念はある国家全体の人々の意味で登場し，まさに1526年にはすでに「国民議会」《Nationalversammlung：対トルコ戦争をきっかけにして成立，諸侯に信仰自由選択の権利を認めた》という表現がみられる。それは最初の（第１の）大ドイツ国民（ネーション）感情の時代である。そして，1867年にハノーファーで「国民（ネーション）自由」という表現が，ドイツにおける国民（ネーション）運動を勝利へと導くために，ビスマルクと友好関係を築いた政党の名称として登場したことは，高まる第２の波にとって特徴的である。

② 国民（ネーション）の拡張・縮小の理由：それでは国民（ネーション）の拡張や縮小はどのようにして起こるのか。カヴェラウは次のように述べている。「国民（ネーション）は経済的最大値の水準にしたがった人民大衆の水平的な集中原理と分散原理である。わたしはここで天気図との比較よりも，より良い表現を知らない。すなわち，世界経済的最大値の『高気圧』のもとで集中化，国民的統合，大権力形成が起こり，『低気圧』のもとで分散化，地方分権，小国家群が起こる。国家的垂直性と国民（ネーション）的水平性の結合はその境界内での豊かさを規定し，ひとつの国民（ネーション）国家（Nationalstaat）へと統合する。しかしその国民（ネーション）国家も近い将来，再び敵対する諸国家に分裂するかもしれない」。

③ 証明と例示：以下，この項目の末尾までは，前項での主張の証明と例示に関するカヴェラウの論述を手短にまとめる。

世界経済の最大値は1400年頃地中海とバルト海の間（ベネチア，ジェノバ，ダンツィヒ，リューベック）に，それゆえ中欧に位置した。イタリアとドイツは国民（ネーション）的高揚のなかにあったが，そのことは国家的権力展開と同意義ではない。その後トルコ人の進入はレパント《地中海東部沿岸一帯地方を指し，中世東方交易の中継地域》交易を破壊し，北部ドイツの諸都市は直ちにスペインとの，すなわち新たに栄えつつあった大西洋交易との結びつきをみいだし，後にスペイン・オーストリアの二重地位の崩壊にも巻き込まれることとなった。世界経済的最大値は1500年頃，大西洋岸に移動する。最初はリスボンが世界的株式取引所であり，1600年頃はアムステルダム，1700年頃はロンドンである。中世において，そして16世紀初頭にはまだ世界経済の中心的地位にあったドイツが周辺部になってしまった。というのは「高気圧」はベネチアーリューベックからリスボンーアムステルダムーロンドンに移ったからである。16世紀初頭に諸都市の統治のなかで，宗教改革のなかで，農民の諸要求のなかで，グリューネヴァルト《Matthias Grünewald：1460頃-1528，ドイツの画家》とデューラー《Albrecht Dürer：1471-1528，ドイ

ツ・ルネサンス絵画を完成させた画家・版画家》において，ハンス・ザックス《Hans Sachs：1494-1576，ニュルンベルクの靴屋の親方で詩人》やドイツの詩歌において勝ち誇っているような国民的意識によって1400年頃かなりの度合いで満たされていたドイツ，ドイツは16世紀後半には小邦分立の分裂状態に，かろうじて直接的な大西洋岸の遠い後背地に後退的に落ち込んだ。

かなり多くの内陸水路が建設され(17世紀と18世紀)そして相当数の地方道と幹線道路が誕生し（1800年頃），そしてその後おおいに蒸気力が利用され，そして鉄道が建設され（1850年頃），その結果，後背地はいっそう広がり，西欧は大西洋最大値の最盛期に組み入れられた。そのための段階は，より限定的にいえば，1833／34年の関税同盟，関税同盟の1862-65年の西欧自由交易条約への加盟である。

1850年にはドイツとオーストリアとハンガリーを結ぶ道路の総延長は637マイルだったが，1869年には3950マイルに，そしてようやく1870年に北海交易はバルト海交易を初めて凌駕した！　今や，世界経済の変革が1868年のスエズ運河の開通とともに始まった。世界経済は再び地中海を溢れるように通るようになり，スエズ運河はロンドンからボンベイまでの道のりを43.5％ほど縮め，香港までを28％ほど縮め，以下の登録総トンがスエズ運河を通過した。

1870年	40万総トン
1880年	430万総トン
1900年	1370万総トン
1910年	2300万総トン

かくして1870年頃，世界経済的最大値は新たにゆっくりと中央の方向に移り，1900年頃にはベルリンが世界的株式取引所である。そして1914年８月にパナマ運河が開通した。ヨーロッパから北中米西海岸への距離は３分の２ほど縮まり，南アメリカからの距離は３分の１ほど縮まった。

ドーバー海峡からの距離は

	ホーン峰経由	パナマ運河経由
サンフランシスコまで	27500km	11500km
パナマまで	23500km	8500km
バルパライソまで	17500km	13000km

そしてそのようにして世界経済的「高気圧」がゆっくりと大西洋岸から太平洋岸に移動している。今日ニューヨークが世界的株式取引所であり，近いうちにそれはサンフランシスコに存在することになるだろう。再び中欧を「低気圧」が動いており，再び16世紀後半におけるように，地域的没落が，寸断が，潜在的危機がある。

５．国家が国民（ネーション）をだいなしにしてきた……

講話のために準備した簡単なレジメのなかでカヴェラウは「国家は垂直的階層化にしたがう社会の構築で……国民（ネーション）は水平的方向の社会の編成である」と規定している。

カヴェラウが国家にたいして否定的な立場をとり，国民（ネーション）にたいして肯定的な立場をとっていることは，かれが若い共和国《いわゆるワイマル共和国》の国旗《黒赤黄３色，それにたいして黒白赤３色の国旗は第２帝政時代のものであり，後にナチス時代にも使用された》に関連して述べていることからも分る。

「若いドイツ共和国は，古いドイツの色彩である黒赤黄３色の印において国民（ネーション）的な，諸民族〔人民〕をひとつにする力を記憶している。その３色は他のすべての民族〔人民〕にとって権力の象徴でなく，かえって自由と公正の象徴である。－　そしてそれに反抗するのは，再び国家的・教会的・垂直的権力である」。

それどころかカヴェラウは1848年以降のドイツでは国家が繰り返し国民（ネーション）をだいなしにしてきたとする。1848年はウィーン体制革命を崩壊させた２月革命（３月革命）が起こった年であるが，結局その国民主義・自由主義運動は不成功に終わった。ドイツにおいてもそうである。それ以降の経緯をカヴェラウは次のように述べている。

「さらには，ドイツにおける反動派の勝利が，そして自由主義的な志操を有する市民の全世界への規模の大きい移住が想起される。1852年には移住数は10万人という当時としては大きなものであり，それどころか1854年には19万人であった。かくしてドイツはその最良の血を全世界に，主にはアングロサクソン諸国に提供した（1821年から1902年までの間における合衆国への1900万人の移民のうち500万人がドイツ人であった！）が，それはなぜか。というのは国家は，封建的に拘束されている場合，束縛されざるものを安定させようと欲するからであり，そしてだからこそその圧力によって，しかし拘束されておらず，組織されていない水平的諸勢力を解き放ったからであった。そしてそのような反動派の勝利はビスマルクの政策へとつながった。小ドイツ党の勝利とプロイセンによる問題解決は国民思想にたいする国家思想の勝利となった」。

カヴェラウはまた現に（1924年時点）国家は反国民（ネーション）的であるとし，その証拠として次のような状況について比喩をまじえながら述べる。

「ドイツ国家がそのさまざまな表現においてどれほど甚だしく反国民（ネーション）的かは，まさに国民（ネーション）の利益となるすべてを禁じようとするその関税政策から分かる。

今日ヨーロッパを急行列車でそして時速100kmで通り過ぎる者は，関税や旅券の障壁によって妨げられる

とき，繰り返し新たに憤慨する。その現代人は，1833年《ドイツ関税同盟は1834年に成立》の旅行者が体験していたことを，現代において体験する。国家体制の周囲は釣り鐘の鐘のように硬く硬く固められており，そしてあらゆる自由通行を阻止する。難儀して，虫けらのように卑屈になってしまう手続きのもとで，個々人は釣り鐘の下にやっと我が身を押し込むのだが，すぐに再び新しい釣り鐘にぶつかる。ヨーロッパの国家構成は今日，すでに本質的には確かに存在するヨーロッパ国民（それは土地および地下資源の所有者のエゴイズムによってのみ阻まれそして分裂させられる）の障壁である」。

6．カヴェラウの願いと予言

かくしてカヴェラウはヨーロッパの統合を願う。それはドイツ人にとっても必須である。

「まさにドイツ人のなかで国民（ネーション）的に思考する者は，ひとつのヨーロッパを願わねばならない」。

さもなければドイツ人はポーランド，リトアニア，フィンランド，ロシア，ルーマニア，ユーゴスラビア，イタリア，ハンガリー，フランス，ベルギー，デンマーク等々で真の生活力と自由を守ることができないからである。さもなければドイツは他国を侵略することとなる。そのようにカヴェラウは訴える。

「あるいは全ドイツ同盟《帝国主義政策を支持するドイツ人組織》の誰かのように理性を徹底的に喪失し，それらの国家すべてを『占領』したいのか。－そしてその上，ひょっとしてさらに南北アメリカ大陸を」。

残念ながら，カヴェラウの訴えはドイツにおいて多数意見とならず，かれの悪夢の予測は現実となってしまった。しかしその悪夢が覚めた後，かなりの期間の紆余曲折はあったものの，わたしたちが今知っているように，カヴェラウの願いはＥＵ（ヨーロッパ連合）において相当程度に実現している。たとえば，こんにちヨーロッパ諸国を旅する者は関税や旅券の障壁をほとんど感じない。

もとよりカヴェラウはヨーロッパの統合と平和のみを理想としていたわけではない。むしろ非ヨーロッパ地域を見下すヨーロッパ意識を諭し，世界レベルでの平和秩序を目指していたことは，たとえばかれの次の言葉からも分かる。

「ドイツ民族〔人民〕は新しいヨーロッパ，つまりヨーロッパ国民（ネーション）の酵素であり，すべてを包括する国際連盟の酵素である。わたしたちが旅券や関税の障壁を破壊することで大きく，広い経済領域を生みだすときにのみ，わたしたちは運河建設によるのと同様にヨーロッパじゅうに世界経済の最大値を定着させることができ，……いくつかの命令する局部的な権力への分裂を回避することができる」。

「とはいえ，わたしは誤解されたくない。すなわち，それらの要求によってヨーロッパとヨーロッパ外の間の対立が考えられるべきではない。新しいヨーロッパは，ますます虚栄心によって非ヨーロッパを見下す不遜で愚かしい子どもではない。統一的ヨーロッパは統一的世界秩序への道であり，１つの段階，次の段階である」。

Ⅲ．「世界市民，ヨーロッパ人，ドイツ人」論

1．全地球的，倫理的であること－カントに倣って

「歴史教授のための国際大会」の３日目午後におこなわれたカヴェラウの講話は大会を締めくくるものであり，大会の成果をその倫理的側面について総括するものである。同時にカヴェラウのこの報告は歴史教授のための国際大会から世界平和大会に向けての舵取りとなるべきものであった。それゆえ徹底的学校改革者同盟内の狭いドイツ内研究グループから，来るべき世界平和大会の世界的研究グループに橋渡しをするものである。

冒頭で一覧にしたように，大会の２日目は「世界市民の日」であった。カヴェラウは「ヨーロッパのあらゆる地域から，そしてさらに中国とインドから新しい人類の力がわたしたちの心を揺さぶった」と述べた。そして，大会３日目午前にはイギリス人フレデリック・グールトが歴史教授が有する倫理的な力に関して講話した。「それは実にわたしたちに感動を与えた真の人道性であった」とカヴェラウは高く評価した。

その際カヴェラウは自身および徹底的学校改革者同盟が「大陸規模で，全地球的に，コスモポリタン的に」考え，かつ気づくことを学んだのは，貿易と科学技術の発展，あらゆる時代の人類の闘いとならんで，カントのおかげであるとしている。カヴェラウはカントを全人類的に思想した哲学者であり，偉大な平和主義者であるとしている。カントの論説『永遠平和のために』で展開された思想は世界大戦後の時代では倫理的に義務的な課題であり，政治的に必要な行為であり，実践的に実施可能な現代的偉業であるとカヴェラウは述べている。

2．キリスト教教会を弾劾するカヴェラウ

この講話でカヴェラウは世界大戦におけるキリスト教教会の対応を厳しく糾弾する。かれはその際，イョルク・マガーを援用しつつ，世界大戦とキリスト教の関係を次のように説明する。

① 世界戦争は十分に，キリスト教が事実上殺人者の巣窟に変質してしまっていることを証明している。

② 本物のクリスチャンにとって，世界戦争の強盗殺人への加担を回避することが聖なる義務であろう。

③ というのはキリスト教の本質は悪を善によって，憎悪を愛によって，戦争を柔和によって克服するという点にあるからである。

カヴェラウによれば，マガーは「キリスト教が殺人者の巣窟」になってしまった原因を，「野獣人間」や「暴力的な人々」がかれらの犯罪目的のためにキリスト教の力を利用（悪用）しようとし，その結果，嘘の徹頭徹尾偽造されたキリスト教（真のキリスト教でないもの)が普及することになった点にあるとしている。そのようなことはキリスト教がローマ帝国の公認宗教になってからなされているとマガーが考えていることは文脈から分かる。筆者は，そのような考え方がトーマス・マンによる第2次大戦後早々の講演「ドイツとドイツ人」(『講演集 ドイツとドイツ人』青木順三訳，岩波文庫，1990年，36頁等参照）でナチス時代のドイツを悪魔に取り憑かれた時代とよんだのと似ていると思う。その考えは「否定されるべきはドイツやドイツ人そのものではない」という点では正当である。しかし悪魔とは何か，ドイツはなぜ悪魔に取り憑かれたのか，を明らかにしなければ，真の問題解決にならない。それと同様に否定されるべきはキリスト教とキリスト教徒そのものではないということは正当であろうが，野獣人間とは何か，なぜキリスト教がその野獣人間に悪用されえたのかが明らかにされねばならない。

その点ではカヴェラウの「キリスト教の水平的，革命的，諸国民結合的な力は国家的－垂直的に受けとめられ，そして権力保持者の繁栄と諸国民の災いのために役立てさせられた」という言葉，そして「カトリック教会が超国家的に組織されていることは，その幸せであり，ただそのようにしてのみカトリック教会は真の平和の友をそのトップにおくことができる」という指摘が重要である。神やカトリック教会にでなく，国家に従属し，国家に奉仕するキリスト教会と牧師・司祭たちが問題であると考えられていることが分かるのである。

カヴェラウはここでの講話の半分程度をキリスト教教会の行動批判にあてている。当時の著名な（高位の）牧師・司祭の言葉を引用しながら実証的に執拗に批判している。しかし筆者はカヴェラウの真意は別の点にあったように思う。少なくともカヴェラウのキリスト教教会批判は，そのまま第1次世界大戦以降の社会主義者への批判としても通用するのである。

3．アジアの文化を尊敬するカヴェラウ

カヴェラウはキリスト教そのものも，宗教そのものも否定しない。それどころかかれは，真に宗教的な人間から人間性への道が見いだされることを示すために，「汝の敵を愛せよ」というイエスの言葉と並べて，仏陀と老子の言葉を紹介する。

「かれは生きとし生けるものに愛と同情を抱く」(仏陀)

「武器は災いの道具であり，賢者の道具ではない。……しかし人殺しが喜びであるようなことは国家目標とならない」(老子)

そしてカヴェラウはそのようなアジアの文化はヨーロッパの通常の「キリスト教」文化を凌駕しているとする。そして同時にかれはヨーロッパ人が他の諸国民を蔑視することを常としてきたこと，あたかもヨーロッパ人が体験していることだけが歴史であるかのように，ヨーロッパ人がもたらしてきたものだけが文化行為であるかのように考えてきたことを告白している。

4．「歴史の歪曲者」を皮肉るカヴェラウ

上述のイエスや仏陀，老子の言葉を，カヴェラウは皮肉をこめて言うが，株の上がり下がりに注目する現実政治の実践家は「子どもじみた理想主義」，「感動的な世間知らず」と中傷する。そしてその種のドイツ人は「フランス人たちはライン川とその豊かな両岸を略奪したがっている，1000年来－そのことは歴史が教えている」と大声でまくしたて，その種のフランス人は「ドイツ人は野蛮人でそして文化の敵である。かれらが持っている財産は常にまず最初に西方からもたらされねばならなかった－そのことは歴史が教えている」と金切り声をあげると指摘するカヴェラウは，ここでもまた「歴史はもちろん，常に歴史の歪曲者たちが存在したし，そして昨日についての学識あるお喋り屋たちが存在したことを教えている」と皮肉っている。

5．ヨーロッパ合衆国を提唱するカヴェラウ

カヴェラウはようするに事実をみなさいと述べているのである。歴史を正しくみなさいと言っているのである。そうすれば「わたしたちのうちの誰」も「他の諸国民の詩や科学的研究なしに，発見や技術的達成なしに実存」できないことが分かるというのである。そして「わたしちは，まさに以前からヨーロッパ人である！18世紀以来，わたしたちは共通のヨーロッパ文化を持っている」ことが分かるというのである。そしてカヴェラウは1920年代半ばの時期，「ヨーロッパ合衆国がウラル山脈からスコットランドおよびアイルランドの西海岸に達する時がきている」とする。「そこではフランス語，ドイツ語，ロシア語が地域言となる。今日，バイエルン語と東プロイセン語，ザクセン語とラインラント語，ポンメルン語とシュヴァーベン語がドイツのなかの方言であるように。それらの方言すべては互いに了解困難であるか，あるいはまったく直接

的には了解されず，仲介語としての高地ドイツ語を必要としている。かくして国際補助言語が，ヨーロッパ合衆国を，さらには世界共同体を直接的に生み出すためには必要である」ということにまで言及している。

6．ヨーロッパ合衆国の必要性を語るカヴェラウ

レーニンは『帝国主義論』のなかでヨーロッパ合衆国について「それは，世界文明の目的を促進するどころか，かえって西欧の寄生というおそるべき危険をまなきかねないものである」というホブソンの言葉を引用し，支持している。もっとも「現在の帝国主義的情勢のもとで」という限定のなかでであるが。それにたいしてカヴェラウはヨーロッパ合衆国を支持する。

①それは戦争の危機をおおいに軽減するであろうし，ヨーロッパは比類なく盛期を確保するだろうし，世界共同体と世界平和の強固なかなめ石であろうとし，国際連盟の妨げでなく，かえってまさに国際連盟を生き生きとさせ，力を高めるための道筋である。

②ヨーロッパのバランスをとるだけでなく，ドイツの自己維持のためにバランスをとらねばならないという状態はドイツをして，ヨーロッパ合衆国を目指す政策へと強いる。

7．ドイツ人であることの意味を述べるカヴェラウ

カヴェラウはドイツ人であることはむしろ偉大な課題であり，精神や魂の行為であるとしている。いわゆる人種主義の立場をとっていない。それがどのような行為であるかを，ゲーテ，ヘルダー，カントを範にして説明する。それは戦争に深く反対することであり，人間にとっての法権利を厳粛に守ることである。フィヒテは一般に民族主義者と考えられている。そのフィヒテですら実は民族のなかの純粋に人間的なものの前進的形成を求めたのである。フィヒテに学び，おおいに影響されたエストライヒもそうであるが，民族的なものの中核にグローバルなものがみられている。普遍的価値を身に付けた人こそが真に個性的であり（さもなければ変人，変わり者でしかない），人格者であると言われる。同じく純粋に人間的なものを開花させた民族性こそが真の民族性であるとカヴェラウが考えている。

まとめにかえて

2004年春：国家が垂直的であり，国民（ネーション）が水平的であるというカヴェラウの考え方をかなりの期間，しっくりとは受けとめることができなかった。しかし2004年４月にイラクで３名の日本人が人質となり，その結果，日本国内で３名の人質の方にたいして酷いバッシング（自己責任論）が起こった一連の経緯を通じて，カヴェラウの問題提起に納得することができた。すなわちバッシングは国家政策を垂直的に（上から下へ）強制するものであり，その枠からはずれる者を容認しないという国家権力の姿勢を露骨に表現していた。人質であった期間にすでに心身ともに疲弊しきった３名の方を，さらに追い打ちをかけて苦しめる自己責任論の論者をみて，筆者は「国家が国民（ネーション）をだいなしにしている」ことを実感した。そして同時に，わが国の社会科教育には重大な課題がつきつけられていると考えた。

しかしそのような動きにたいして３名の人質の方およびかれらに共感し，支援した人々も多数存在した。その人たちは他者と連帯しようとする（いわば水平方向の）動きを体現していたといえよう。その点では，ひょっとしてわが国の社会科教育も健全な公民的資質の形成に貢献しているのではないかと思えた。

2004年秋：10月28日，恒例の園遊会が開かれた。報道によれば，招かれて出席していた東京都の教育委員は天皇陛下に「全国のすべての学校で日の丸を掲揚させ，君が代を歌わせるのが自分の任務である」と語った。それにたいして天皇陛下は「強制はいけません」とたしなめた。ここにも垂直方向と水平方向のせめぎ合いがあると思った。

カヴェラウの主張にもかかわらず，ドイツはその後ナチス独裁の時代を迎えることとなった。わが国はそのような道を決して歩んではならない。